

わたくしの
シルクロード ⑩



横張和子

アジア絵画展望 (その一)

西域北道クチャ・スパン出土の舍利容器を飾っている彩画は六七世紀ころの西域のオアシスの住民の風俗をよくあらわしていると共に、また西域絵画の特徴をみせていて、アジア絵画の資料として珍重に値いするものと言えました。ことに人物などの輪郭をくくると強い粘りのある墨書きの線は特に「鉄線描」といわれて、絵画様式史の上で注目されることはすでに述べました。奈良

法隆寺の金堂内部を壮麗していた壁画の描法に見出され、絹の道はまた絵画様式を東方の最果てにも運ぶ道であったことがうかがわれます。

今回は日本の古代絵画をも含めて、広くアジア絵画の展望をその様式史の上からこころみたいと思います。上代の絹織物の技法を深く中国に負うた日本は絵画においても中国を模範としました。それゆえまず中国画から述べていきたいと思います。

世界的に古画的完成を遂げた中国絵画の本領は伝統的に線描にあります。それは「骨法用筆」として尚ばれ、描かれた線には



▲図版① 鳥毛立女屏風 奈良

品位が与えられました。画家達はそれにより絵画の究極の理念である「氣韻生動」を実現するためにその生命を賭けたのでした。玄宗治世（紀元七一二―七五六）の盛唐の画家呉道玄（子）は「才思遠」にして「筆を下すこと神助あるが如し」といわれて、当代随一の大画家としてもはやされ、長安や洛陽の大寺院の壁画の制作日に寧日なかったといわれます。かれの揮う筆の勢いは迅速に飛動して、勢い余って粗放に走ったともいわれています。筆先を打ち込み、力を抜き、再び力を加えて、すばやく描き切るその筆描のために、線に肥瘦が生じて、弾力のある、霸氣溢れた

▼図版② 永泰公主墓壁画 紀元702年



描画であったということです。かれの遺作は今日みることはできません。しかしわが正倉院の麻布菩薩像に呉道玄流の線をみるこ
とができるといわれています。また同じ正倉院の北倉の鳥毛立女
屏風をみますと、各扇とも立樹や右に唐風の女を配したいわゆる
西域に流行した「樹下人物図」です。顔の部分を除いて衣服など

には日本に棲息していた山鳥の羽が貼りつけてあったのですが、今はその羽毛がすっかり剝落して、下絵の線描がみえています。

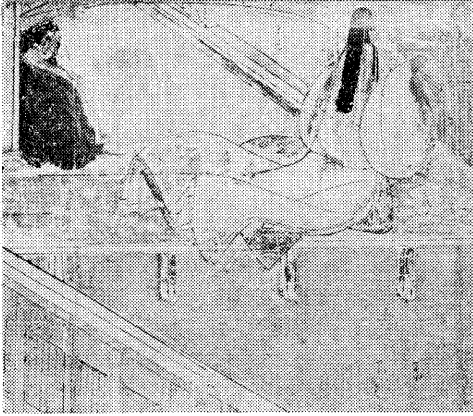
問題はこの下描きの線です。麻布菩薩像ほど筆勢はなく、線の肥瘦も著しいものでなく、おだやかで、のびやかなものになっています。しかしなお生動に富んだ線です(図版①)。

ここで想起されるのが中国解放直後に着手し、発掘された永泰公主の墓の壁画です。則天武后の怒りをかけて、十七歳の若さで死を賜った不幸な皇女の死を悼んで、父中宗の復位と共に神竜二年(七〇六)の梁山の麓に壮麗な墓が営まれました。揮図はその墓の前室東壁に描かれた壁画です(図版②)。一皇女の墓に過ぎませんのに、壁画の作行は非常に優れていて、一級の画家の下に描かれたものでしょう。構図が複雑で、人物はその一人一人が表情や年齢の相違が描き分けられ、頭髮や衣服なども適確に表現されています。それらが可能とされるのも微妙な抑揚のある墨書きの線によっています。その線描はさきの鳥毛立女の下絵の線と相通ずるものがあります。鳥毛立女の下絵を描いた画家は日本人でしょう。日本人が唐朝の絵画を手本としながら、もっとも日本人が目にし得たのは遣唐使などが中国から船載してもちかえた画巻の類いから得たものにせよ、天平時代には十分に、その技術を自己のものにしていたことが分ります。

それはやがて、国風化の趨勢に従って「やまと絵」の中に流れていきます。「やまと絵」は日本人の心情にもっとも適った、もっとも日本的な絵画であり、日本文化史上、はじめて手にした固有の絵画様式です。「源氏物語絵詞」などの優雅典麗な世界はやまと絵の典型的な画風とされています。しかしその濃彩の下にあらわれた下書の墨線は奈良時代以降のアカデミックな技術を継承していることが認められています(図版③)。やまと絵の中でも絵巻物には二種の様式があって、源氏物語絵詞のようなものは平安貴族の女房たちの手すさびあるいは教養的なたしなみとして描かれていた「女絵」の系統に属しますが、今日残るような芸術的にも品格の高い作品は官宮の「絵所」で、専門的な男性画家によって製作されていました。絵所では史上に名を残しているような有力な画家をリーダーとして、その下に多数の画家がいて、分業で制作が進められていきました。仕事の中で、もっとも重要なのは、作品の構図を考えて、下書の墨描きを行なうことと、彩色後の仕上げの墨の描起しをすることで、それは「墨書」という役職名のあるリーダー格の主任画家が当たったことが古文書から知られています。

源氏物語絵詞の作者として伝えられている藤原隆能もそうした主任画家であったのですが、しかし、今日名古屋の徳川美術館や

東京の五島美術館に伝えられている断簡についてはその作者は確かめられていません。何人かのリーダーダ格の画家の下で制作されたらしいことが調査の結果分っています。源氏物語絵詞と特徴づけているのはその「引目鉤鼻」ですが、これを描くのも「墨書」の仕事で、その出来栄えが作品の出来不出来を決定しました。それは決して一本調子の線を引き、また折り曲げて描いたというものではありません。細い墨線を幾重にも入念に描き込んでいて、それによりやわらかく、ふっくらとした王朝貴族の顔立を仕上げて



▲図版③ 源氏物語絵詞（すずむし）
紀元 1200 年初め

いるのです(図版④)。一見すれば類型的、非個性的と評されがちなその独特な手法は、しかしその物語の登場人物の悲痛な、内に沈んだ深い心理や感情を露わに表現することを避けて、微妙なニュアンスで伝えようとするもので、それは当時の貴族たちの感情を作品に移して鑑賞する仕方に極めて適合した描法であったといえます。線の動勢を極端なまでに抑えたこのような描法においてこそ、叙情性を身上としたこの時代の物語の画致が作られたといえましょう。

▼図版④ 源氏物語絵詞（引目鉤鼻）

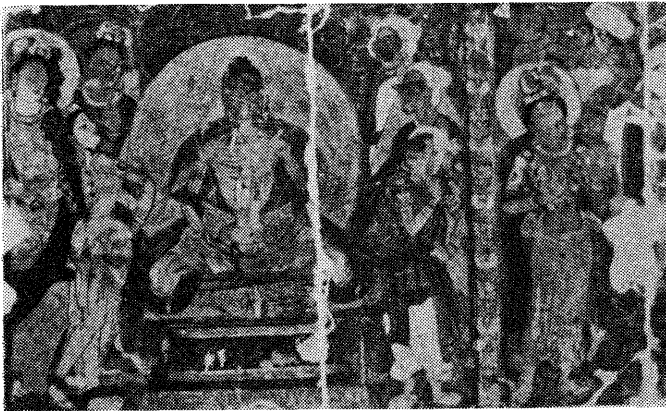




▲図版⑤ 法隆寺金堂壁画
(阿弥陀浄土図部分)

法隆寺金堂壁画は四つの壁面に四仏浄土つまり釈迦、阿弥陀、
 (図版⑤) 弥勒、薬師の浄土相を描き、白鳳絵画の代表作です。人々はこの壁画の描線に鉄線描の名を与えてきました。
 太宗治世(六二七―六四九)の画家尉遲乙僧は、ベルシヤ人で西域のコータンの出身の画家といわれます。かれの描くところは、『歴代名画記』に「屈鉄盤糸の如し」と評され、長安の慈恩寺に凹凸のある花の模様を描いたことで名をはせていました。この凹凸画とはどのようなものか、察するのに、ものの立体をあらわすために陰影法を用いたものではないかと考えられています。中国

▼図版⑥ 降魔図 キジール孔雀洞



では「応物象形」といえども骨法すなわち線描で実現しようとし、立体表現法としての陰影法は余り問題とされなかったのです。しかしこの西域出身のへき眼の画家は彩色に暈しの法を用い

て凹凸の効果を出し、さらにそれを鉄線のような線描で、輪郭をくくった画法をもって、制作して、中国人の衆目を集めたのでしよう。

かれはまた長安の光宅寺に降魔図を描いたといわれています。

画史には「千快万状、実に奇蹤なり」そして「(釈迦の)脱皮せる白骨の意匠きわめて峻にして、また変形せる三魔女の身は壁より出するが如し」とあります。これを讀むと、西域北道のキジール孔雀洞の壁画の降魔図を思い起します。(図版⑥)苦行の果に骸骨のようになった釈迦が中央になお端然と座し、その左右から肌を露わにした美女が身をのり出して、釈迦を誘惑しようとする図です。様式化に傾きがちと考えられるアジア絵画がいったん造型のリアリズムに賭けるとこれほどまでに徹底した描写を行なうものかと驚きですが、過酷なまでにやせさらばえた肉体に浮き出た肋骨を描いた墨には、ただ線ばかりではなく、それにそって、暈しの陰がつけられています。自身の魔女の姿態を描く緊った強い線描の、その肉身の線にそって、朱の隈どりがほどこされています。尉遲乙僧の画技、すなわちそれは西域の画法でもありませんけれど、それはおおまかにいって鉄線描と隈どりの結合した手法であったことが推察されます。これがある距離をおいてみると、人物の像は平面の壁から立体的に浮かびでる効果があったと想像さ

れます。

アジアの絵画、中でも仏教絵画の立体表現は紀元一世紀の末ごろ西北インド・ガンダーラの地にギリシヤ式の仏像があらわれたことと無関係ではないでしょう。東方の所産である仏教が、西方の造形、ことにその中樞をなしていた彫刻に技術を学んで、仏・菩薩の像を刻んだのと同じように、仏教絵画もギリシヤ式の絵画技法を学んだとは容易に考えられます。中国僧玄奘法師もまたというインド・ナガラハラに仏影窟の仏画像は近づいてみると朦朧とし、遠くからみると、そのお姿が把握し得たといい、これはおそらく輪郭線のない、色彩のみの画法であったことが考えられます。それはあたかもボンベイ画の後期のものにみられる色彩のタッチの粗放な、一種の印象主義的手法を用いたものかと考えられます。それは前にご紹介したアフガニスタンのベグラムで発掘されたガラス器の彩画とも共通しています。

このような絵画の手法はガンダーラよりも東の西域南道のミラン古址の壁画に見出すことができます。これらはイギリスの探検家A・スタイン脚によって発掘され、壁から切り離されて、現在インド・ニューデリーの国立博物館の中央アジア部に陳列されています。十年ほど前に、これをみに行ったのですが、インドの激しい戸外の日射しになれた目で、ややほの暗い部屋に入り、こ

れをみたととき、それは千数百年の年月、砂漠に埋れていたものとはとても考えられないほど、みずみずしい鮮やかな色彩をみせていました。挿図は第五址の仏塔の周歩廊の外側の壁の腰張に描かれていた絵様帯の一部で、建物が崩れて、日干煉瓦の土が堆積した中に埋没していたもので、それがかえって保存を助けていたのです。

絵様帯は花綵（ガーランド）を担ぐ天使たちで、その間に各種の民族衣裳をつけた人物が描かれています。中で一きわ目を惹



▲図版⑦ ミーラン第五址壁画部分
3世紀末

くのが巻髪の少女です。（図版⑦）少女は黒い髪を後に束ね、赤い大きなイヤリングをつけています。そのかたわらに一筋の髪の毛をカールさせているのが一層魅力的で、スタインの発掘品を整理したH・アンドリュウス氏は目録解説でこれを“Kiss curls”と愛着をこめて、記しています。頭には白地に赤い花の模様を並べたデアデームをかぶっています。つぶらな大きな目、つややかな口唇は可憐です。左肩にかけて、淡黄の上衣に緑のストールをかけています。大らかな遠くをみるようなまなざしは彼女の故郷が遙

▼図版⑧ ローラン出土の綴織壁掛断片
3～4世紀



か西方にあるかのようです。ここで注目すべきは人物の肉附法です。よくみると淡紅色と灰青色の細かな色のタッチを重ねて、微妙な陰影をつけ、人体の自然な肉付け（モドレ）を行なっています。しかしそれにもかかわらず、顔の輪郭や目や鼻また耳などの細かな部分は赤褐色の線で、再び形作られ、首筋には仏画でみるような三すじの線が約束のような描き方で描き込まれています。気分においては西方的ですが、線の描出がみえてきて、東方化の傾向がみえてきています。壁画の製作年代は三世紀のわりごろとされています。この時代ミーランに近いニヤの遺跡から、木簡の封泥に押されていた印章の図にギリシャの神々の姿がみえていたり、彫飾りのある椅子の木彫のモチーフにアカンサスなど西方系の模様を用いているものがあつたりすることと考え合わせると、これは興味深いことです。

このような作品をもう一つあげてみましょう。織物なのですが、スタインがミーランの東、ロプノールの北頭のローランの遺跡で得たもので、毛織壁掛けの断片です。（図版⑧）中央の紐状の形はヘルメスのシンボルともされていますが、スタインの解釈では、ここに織り出された人物は釈迦の弟子であろうということですね。ガンダーラ美術と同じような手法であるわけです。象徴的な図形を真中にして、左右に異なる人物が配されていたものよう

ですが、左方の人物の姿はこれではみえず、わずかに髪と頬の一部、それに着衣の衿の部分らしいのが残るのみです。右方の人物も顔の大半を失っていますが、大きく見開いた眼やひきしまった口許にミーランの少女と同じ顔つきを認めます。赤く織り込まれた糸は血色のよい若者の肌の調子をあらわしています。顔の輪、眉、鼻筋は褐色の線で強く描かれ、目や鼻の下など影になる部分には暗色の隈どりがほどこされています。それはもはや色の面となって、固定してしまっています。しかし若者らしい張りの

▼図版⑧ 毛織タピストリー断片 シリア
あるいはエジプト 紀元3～4世紀



ある肌の調子はミーランの少女のそれを基本的には同じ細やかな暈しの手法がとられていて、その効果をだしています。顔を描くことではなお自然主義的な描写の配慮がみられますのに、衣服の扱いとなると衣の襷は黄土に紫の濃淡を層的に並べてあらわしています。色の明暗の推移が便化して隈どりとなっていくのです。年代は三〇四世紀とされています。

もう一例、これも毛織のタピストリーの断片です(図版⑨)。これはシリアあるいはエジプトの産とされるものです。人物のモデリングはローランの釈迦弟子に共通していて、細やかな明暗のタッチも用いられていますが、鼻筋から顎などの暗色の線や眉や眼などの部分は中国の京劇やわが国の歌舞伎の役者の隈どりを想い起させます。豪華な服飾や背後の円光のようなものから、この婦人が高貴な、神話の人物をあらわすもののようにですが、表情は暗く、東方の若者や少女が遠く西方を夢みて、明るい表情をしていたのに比べて、これは違います。この婦人の、この表情は、ヘレニスティック末期のローマ世界にあらわれた終末思想を表徴しているといわれます。これも三〇四世紀の作品です。シリア絵画については次回にも述べますが、このようにギリシャ人が案み出した色彩の明暗調を用いて、ものの立体や人物の丸味をあらわす手法はそれが波及すると共に便化の傾向をたどり、面や線に置き換

えられていく様子をみせています。しかしこれは単なる手法上の変化とのみとらえることはやや皮相な観方のような気がします。陰影法が隈どりの手法になり、それに鉄線描が結びつくというのは、この時代、精神文化に強力な変革が生じてきたからです。すなわち古代世界は終末を告げ、中世の時代を予告して、この種の絵画様式が生まれたものでしょう。それは東西にわたって広い範囲にわたって行なわれた一種の国際的な様式であったと考えられます。

(続く)

